NEWS RELEASE

SOMPO美術館

2021 年 10 月 29 日

報道各位

絵画のゆくえ２０２２　開催について

2013 年に創設された公募コンクール『ＦＡＣＥ』は、年齢・所属を問わない新進作家の登竜門として毎回数多くの応募者を迎えております。美術評論家による作品本位の厳正な審査によって、真に力があり将来国際的にも通用する可能性を秘めた作品を入選とし、その入選作品の中から各賞を授与しております。

本展は、FACE2019 から FACE2021 までの 3 年間の「グランプリ」「優秀賞」受賞作家たち 12 名の、近作・新作約 100 点を展示し、受賞作家たちの受賞後の展開をご紹介します。また、この間当館の収蔵となった「グランプリ」受賞作品 2 点も併せて展示します。

開催概要

会期	2022 年 1 月 14 日(金)～2 月 13 日(日)
休館日	月曜日
開館時間	午前 10 時～午後 6 時（入館は午後 5 時 30 分まで）
観覧料	700 円（高校生以下無料） ※身体障がい者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳を提示のご本人とその介助者1名は無料。 被爆者健康手帳を提示の方はご本人のみ無料。
主催	ＳＯＭＰＯ美術館、読売新聞社
協賛	損保ジャパン

新型コロナウイルス感染状況等により、本展の会期や内容の変更、または、臨時休館する可能性があります。
最新情報は美術館ホームページ等でご確認をお願いします。

本件に関するお問い合わせ先

(株)ウインダム　〒103-0014　中央区日本橋蛎殻町 1-28-9　e-mail：sompo-m-pr@windam.co.jp　TEL：03-3664-3833

FACE2019　グランプリ

《18.10.23》2018年
油彩・鉛筆・アクリル板

庄司 朝美　Asami Shoji

1988年　福島県生まれ、大阪、青森、東京にて育つ。東京都在住
2011年　第一回宮本三郎記念デッサン大賞展 審査員賞
2012年　多摩美術大学美術研究科博士前期課程絵画専攻版画研究領域修了
2015年　第18回岡本太郎現代芸術賞展 入選（構想計画所として参加）
2016年　トーキョーワンダーウォール2015 トーキョーワンダーウォール賞
2019年　FACE展2019 グランプリ
2020年　令和2年度五島記念文化賞
2022-23年 東急財団助成、ジョージア・トビリシ拠点に西アジア研修予定

【個展】
2021年「2021年の9月」gallery21yo-j・東京
「Unknown Image Series no.8 #3　百目の鳥によせて」void+・東京
2019年「明日のまみえない神話」gallery21yo-j・東京
2018年「泥のダイアグラム」Cale・東京
2017年「劇場の画家」gallery21yo-j・東京
「夜のうちに」トーキョーワンダーサイト渋谷・東京
2016年「トーキョーワンダーウォール都庁」東京都庁第一本庁舎・東京

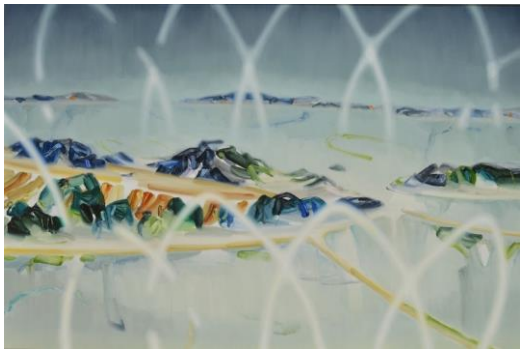
【グループ展】
2021年「BankART Station : AIR2021」BankART Station・神奈川
2020年「9人の眼−9人のアーティスト」渋谷ヒカリエ8/CUBE1,2,3・東京
2016年「また起きてから書きます」akibatamabi21・東京
2015年「Asami Shoji e Toshinori Tanuma」Atelier Controsegno・イタリア
2012年「村田峰紀企画展 人間」小金井アートスポットシャトー2F・東京
2011年「ASPECTS 2011」RSS University Gallery、チェンマイ国立美術館・タイ
2010 年「更新に憑くー可塑的な無人島」 akibatamabi21・東京

【Public Collection】
SOMPO美術館

作家コメント

私は透明なアクリル板を支持体に描いています。パンデミックによってこの素材はどこでも見かけるようになりました。あちら側とこちら側は隔たっているにも関わらず、その透明な壁が存在していないかのように振る舞うことで日常が変わりなく営まれているかのようです。有るけれども、無いことにされる素材。その矛盾は絵画の支持体そのものだと言えます。
アクリル板ごしに見えるこの世界と、アクリル板に描かれた神話的世界は私にとって等価なものです。なぜなら神話は、この不条理で不確定な世界に輪郭を与え、どうにか理解しようとする試みの中で生まれた発明であり、描くことは絵具という物質を多元的な言語へと変えつつ、それによって世界を記述することだからです。
FACE2019の受賞から3年、以来多くのチャンスを頂きました。本年2月からはアジア西端の国ジョージアで1年間の在外研修を控えています。今後も描くことを通してこの世界を少しでも理解したいです。

FACE2019　優秀賞



《汽水域のドローイング》2018年　油彩・綿布・パネル

古橋 香 Kaori Furuhashi

1982年 東京都生まれ、茨城県在住
2004年 筑波大学芸術専門学群美術専攻 卒業
2007年 筑波大学大学院修士課程芸術研究科美術専攻 修了
2009年 前橋アートコンペライブ2009　伊東順二賞
2012年 第27回ホルベイン・スカラシップ奨学生
2018年 シェル美術賞展 入選（’20）
2019年 FACE展2019　優秀賞
2021年 清須市 第10回はるひ絵画トリエンナーレ　準大賞

【個展】
2019年「泥濘の島」Viento Arts Gallery・群馬
2016年「Shinyscapes－まばゆい光景」ギャラリーSAZA・茨城
「古橋香展」六本木ヒルズクラブ・東京
2014年「コーヒー＆アートVol.4 古橋香」水戸市内飲食店・茨城
「Protean Kid」Shonandai MY Gallery・東京
2007年「理想の女の子」PUNCTUM Photo+Graphix Tokyo・東京

【グループ展】
2021年　清須市第10回はるひ絵画トリエンナーレ 清須市はるひ美術館・愛知
「Art Book / Art Goods @BankART Station」BankART Station・神奈川（’19）
2020年　シェル美術賞展2020 国立新美術館・東京（’18）
2019年　中之条ビエンナーレ2019 旧第三小学校・群馬（’15）
「中之条ビエンナーレ2019プレビュー展」西武渋谷店美術画廊・東京
FACE展2019
「絵を飾る」PUNTO・茨城（’15）
2017年「BankART Life Vー観光　Under 35 2017」BankART Studio NYK・神奈川
「風土の祭り」常陸國總社宮・茨城
2016年「新進芸術家選抜展FAUSS 2016」O美術館・東京
2014年 トーキョーワンダーウォール2014 東京都現代美術館（’13）
2013年「Ongoing祭り」Art Center Ongoing・東京（’12）
2012年「SICF13」スパイラル・東京
「MOTHERS」シャトー2F・東京
2011年「BankART Artist in Residence 2011」BankART Studio NYK・神奈川
2008年「カフェ・イン・水戸2008」水戸市街地・茨城
ワンダーシード2008 トーキョーワンダーサイト渋谷・東京（’07）

作家コメント

描くとき、何かと何かをよく繋げようとするか、それとも落差をつくるか、選択を繰り返します。画面の眺めを妨げる線や量し、厚塗り絵具のエッジは、どんな言葉を引き出すだろう。私にとっては分断、パラレル、共存、穴、欠落、etc. 画面上の要素のふるまいは、些細なニュアンスに対応していて、絵はその暫定的な集合体のようなものです。
FACE展に出品した作品は、絵の見直しを始めた時期のものでした。賞に後押しされ、油絵具でドローイング的な軽さとともに質感の抑揚を持たせる様々な方法を試してきました。展示作品の裏に、求める質からずれてしまって出せない作品が多くあります。
透明さも厚みも色に結びつくのだと、漸く、今更、色の効果がわかってきました。まだ知ることがある、絵はどこまでも描いていけそうな気がすることがあります。その一方で、戸外に出よう、そういうふうに時間使っていいのかという思いもあって、なかなか同じ気持ちに定まりません。

FACE2019　優秀賞

《東京》2018年
蒔絵・漆パネル

松崎 森平 Shinpei Matsuzaki

1981年　東京都生まれ、沖縄県那覇市在住
2005年　東京藝術大学美術学部工芸科漆芸専攻 卒業
2007年　東京藝術大学大学院美術研究科漆芸専攻 修了
2009年　東京藝術大学漆芸研究室 教育研究助手
2012-19年 東京藝術大学漆芸研究室非常勤講師
現在　沖縄県立芸術大学工芸専攻漆芸分野 常勤講師
日本工芸会正会員　日本文化財漆協会理事

【受賞】
2004年 東京藝術大学原田賞
2009年 第49回東日本伝統工芸展 山種美術館賞
2010年 第57回日本伝統工芸展 日本工芸会奨励賞
2013年 第53回東日本伝統工芸展 奨励賞
2015年 第55回東日本伝統工芸展 根津美術館館長賞
2019年 FACE展2019　優秀賞 オーディエンス賞
第59回東日本伝統工芸展 奨励賞
BVLGARI　MECENATE　優秀作品賞

【主な個展、グループ展】
2021年「表現する漆」金沢市立中村記念美術館
2020年「工の芸術-素材・わざ・風土」国立工芸館・石川
「現代漆芸2020」金沢市立安江金箔工芸館
2019年「松崎森平漆芸展 夜と海」日本橋三越本店美術特選画廊（'15）
2018年「漆芸の現在形」銀座和光ホール
「URUSHI伝統と革新」石川県立美術館、そごう美術館、MOA美術館
「ASIAN LACQUER CRAFT exchange program in CAMBODIA」カンボジア
「2018福州国際漆芸双年展 新時代新漆境」福建省美術館・中国
2017年「DICORATIVE but CALM」大和日英基金Daiwa house JAPAN・ロンドン
2016年「近代工芸と茶の湯Ⅱ」東京国立近代美術館工芸館
2015年「安曇野市制施行10周年記念展うるしのみらい」安曇野髙橋節郎記念美術館
「伝統工芸の現在性」MOA美術館
2013年「工芸からKOGEIへ」東京国立近代美術館工芸館
2012年「漆芸 軌跡と未来」東京藝術大学大学美術館

【Public Collection】
国立工芸館、石川県立輪島漆芸美術館、中国福建省拓福美術館、イセ文化基金

作家コメント

私は工芸家である。私の思う工芸とは、用途ある形。
誰かのために寄り添えるよう、作り手が素材と対話し、力を尽くす様であると思う。
そこで描くことは、つまり飾ることである。
ある日、自分の中の工芸からはみ出た感情が溢れ、ただ絵を描きたいと思った。
深夜に歩き続ける中で見た風景は、光や闇や水分が滲んでいくようで、この漠然とした気配の全体を描きたいと。
漆黒、蒔絵、螺鈿。素材や技術の新たな可能性とともに、
自分が見て感じたもの、揺れ動く想いが伝われば嬉しい。
画家への憧れを抱きながら、今いる場所をゆっくり描き続けていきたい。

FACE2019　優秀賞

《untitled》2018年
油彩・綿キャンバス

奥田 文子 Ayako Okuda

1980年 大阪府生まれ、兵庫県在住
2005年 大阪教育大学大学院教育学研究科 修了
夢広場はるひ絵画ビエンナーレ 奨励賞
2006年 第20回ホルベイン・スカラシップ奨学生
2019年 FACE展2019 優秀賞

【個展】
2021年GALLERY MoMo Ryogoku・東京（'17）
2020年 mu東心斎橋画廊・大阪
2019年 GAMOYON gallery・大阪
2017年 Galerie Tzigane・大阪
2016年 2kw gallery・大阪（'15,'14,'13,'12）
2013年 Gallery Den mym・京都
2011年 GALLERY MoMo Roppongi・東京（'09）
2008年 Gallery Den 58・大阪
2007年 Gallery Den・大阪（'06）
gallery wks・大阪（'04）
2005年 STREET GALLERY・兵庫

【グループ展】
2021年「Drawing in my room」GAMOYON Gallery・大阪
2020年「SPRING COLLECTION」あべのハルカスアートギャラリー・大阪（'18）
2017年「WONDERS vol.3 In & Out」MINA-TO（SPIRAL）・東京
2015年「Encounter」GALLERY MoMo Ryogoku・東京
2014年「尼崎アートフェスティバル」アルカイックホール・兵庫 ('12)
2013年「Summer Group Show」GALLERY MoMo Ryogoku・東京
2012年　シェル美術賞展2012　('06)
2011年「再生-Regenerate- Part.1」GALLERY MoMo Ryogoku・東京
2010年「winter session of 4 artist」渋谷西武オルタナティブスペース・東京
2009年「ArtCourt Frontier 2009」ARTCOURTGallery・大阪
「Hop Step Jump」GALLERY MoMo Roppongi・東京
2008年　ワンダーシード2008 トーキョーワンダーサイト渋谷・東京 ('06)
「GALLERY MoMo Ryogoku Opening Exhibition」東京
2006年「奥田文子・早川知加子展」GALLERY MoMo・東京
2005年　夢広場はるひ絵画ビエンナーレ はるひ美術館・愛知

【Public Collection】
清須市はるひ美術館、大阪府立精神医療センター、天使病院（札幌）

作家コメント

FACE展で展示させていただいた3年前とは、周りの環境が大きく変わりましたが、私自身は変わらず絵を描き続けています。ただ、大好きな旅に出られなくなったので、モチーフにはやはり変化がありました。もっと広い世界を見たい、表現したいと旅先で集めたモチーフで絵を描いていましたが、最近は水たまりに映る光、足元にできる影など、身近なものを描くことが増えました。壮大な風景ではなくても、そこにあるもので画面を作り、その中に世界を作るという作業に黙々と取り組んでいます。意外と、この地味なモチーフでうまく画面を作れるかな？と心配しながら描き始めた時のほうが、面白い画面になったりして、まだまだ描く対象はたくさんあるな、と嬉しくなったりします。
制作をしていて一番テンションが上がるのは、最後に人物を描き加えて、自分が画面の中に入っているような感覚になる時です。そこに立って、周りを見渡して、ある世界に溶け込んでみる。それは、知らない場所を旅する感覚と似ているような気がします。いつか、また自由に旅ができるようになったら、また作品も変化するのかな、とは思いますが、どんな環境の中でもモチーフをたくさん拾って絵を描けるように、描きたいものを見つけるアンテナを広げていきたいです。

FACE2020　優秀賞

《明日を見つめて》2019年　アクリル・キャンバス

作家コメント

作品をつくるということは、話をすることに似ている。伝えたいことがあり、それを相手にわかるように伝えるという点では同じである。
作品で伝えるということは、見る人が作品の前に立ち止まり、感動したり、受け入れたり、共感したり、時には反論したり、作品と見る人との間で対話が成立することである。
表現は自分の想いだから、見る人は関係なく、好きに制作したらよいのではないかと言う人もいるが、それならばなぜ作品を発表するのか。人に見ていただく以上、対話は必要なことではないかと思う。どのように伝えれば、多くの人が共感したり、感動したりするかを考えることこそが、作品をつくるということである。
しかし、作品をつくることは簡単なことではない。もう何十年も続けているが、常に自問自答を続けており、全く終わりが見えない。今後もまだまだ追求し続けていくことだろう。
やがて作品をつくることは自分自身の人生そのものになるのだと思う。

大槻 和浩　Kazuhiro Otsuki

1962年 兵庫県生まれ、兵庫県在住
1986年 大阪教育大学専攻科（絵画専攻）修了
1982年 二紀展　初入選（以後毎年出品）
1992年 二紀展　奨励賞
1993年 兵庫県展　伊藤文化財団賞
1993年 二紀展　同人推挙
1994年 春季二紀展　二紀新人選抜大賞
1995年 二紀展　同人賞（2004、2006）
2003年 春日水彩画展　優秀賞
2006年 第1回アクリル美術大賞展　優秀賞
2007年 第2回丹波市展　市展賞（最高賞）
2008年 第2回アクリル美術大賞展　兵庫県知事賞
2010年 春季二紀展　新人選抜奨励賞
2010年 二紀展　会員推挙
2010年 第9回小磯良平大賞展　大賞
2016年 芸術文化団体「半どんの会」文化賞　現代芸術賞
2020年 FACE展2020　優秀賞

【個展】
2016年 西脇市岡之山美術館（1998）
2011年 ギャラリー島田・神戸（’08、’05、’01）
2009年 アートホール神戸・神戸
2002年 サンパル市民ギャラリー・神戸
1999年 海文堂ギャラリー・神戸（1997、’95）
1993年 ギャラリーほりかわ・神戸

【グループ展】
2021年「兵庫県洋画団体協議会展」（2011）
2018年「十の会展」洲本市民工房（現在まで毎年参加）
2013年「第10回開催記念 小磯良平大賞展回顧」神戸ゆかりの美術館
2010年「刻のかたち展」あかね画廊・東京
2006年「刻のかたち展」すどう美術館・東京
2006年「第5回波展」原田の森ギャラリー（2009年まで毎年参加）
2005年「第１回西宮造形教育研究会展」西宮市立北口ギャラリー（現在まで毎年参加）
1990年「第１回MAY美展」（1999年まで毎年参加）

FACE2020　優秀賞

《女狩人のごちそう》2019年　油彩・キャンバス

作家コメント

2019年の私は大学院の修了制作と実家から出るための少しのまとまったお金を必要としていました。その時に友人に勧められたFACE展2020に宝くじを買うような気持ちで挑戦しました。結果優秀賞を頂いたことでなんとか金銭的窮地も乗り切り、現在の活動の機会にも繋がる大事な道程となりました。
私はできる限り長く制作を続けていきたいと思っていますが、それには自分の制作に対する思い以外にお金をはじめ、必要だと感じるものがたくさんあります。
この受賞でそのような大事な部分もなんとかしていけるかもしれないと思わせてくださったFACE展には心から感謝しています。
今後も制作を続けていきます。

齋藤 詩織 Shiori Saito

1992年　埼玉県生まれ、東京都在住
2018年 東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻 卒業
2019年 シェル美術賞展2019 松井えり菜審査員賞
2020年 東京藝術大学大学院美術研究科修士課程
　　絵画専攻油画技法・材料研究領域 修了
　　FACE展2020 優秀賞

【個展】
2022年 REIJINSHA GALLERY・東京

【グループ展】
2021年「アートフェア東京2021」東京国際フォーラム
　　「ART OSAKA 2021」大阪市中央公会堂
　　「VOLTA Basel 2021」スイス
2020年 FACE展2020
　　「NightFesta2020」小林画廊・東京
　　「FACE選抜作家小品展2020」REIJINSHA GALLERY・東京
　　「GIFT展2020」小林画廊・東京
2019年　シェル美術賞展2019 国立新美術館
2018年「first展」長谷壱番館 夢ギャラリー
2015年「家展」取手
　　「synchronize」新宿眼科画廊

FACE2020　優秀賞

《身体記》2019年
アクリル・キャンバス

松浦 清晴 Kiyoharu Matsuura

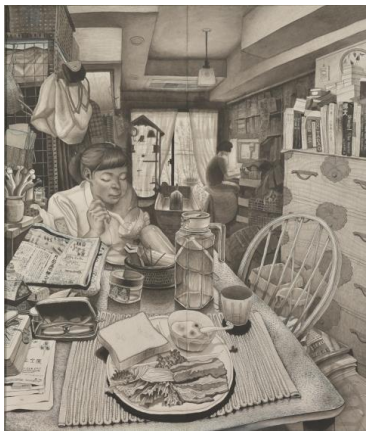
1974年 宮崎県生まれ、愛知県在住
1998年 愛知県立芸術大学美術学部美術科油画専攻卒業
2000年 愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了
2008年 シンジュクアートインフィニティ第4回公募展　入選
2015年 シェル美術賞展2015　入選
2017年 FACE展2017　入選
2018年 FACE展2018　入選
2020年 FACE展2020　優秀賞

【グループ展】
2020年　FACE展2020
2018年　FACE展2018
2017年　FACE展2017
2015年　シェル美術賞展2015

作家コメント

絵画を意識して描き始めたころ。
始めは何も描けるモチーフがありませんでした。ただ絵が好きで何かを描きたいだけでした。
捉えどころのない画面を、動かしたくて手を動かしました。
そこには、行為の跡だけしか残りませんでした。
何もありません。だからそこに何かを捉えられるように形を描きました。
すると何かが動き始めました。
それから、画面とのやりとりを続けました。
色や筆跡をつけてみたところ。
いつのまにか、自分だけの絵画が生まれるようになりました。
私はこのようにして絵画を探求している感じです。
今回、FACE展に関する文章を読む機会があり。コメントの中で「公明正大であるべき公募展」を考えられて、立ち上げたことを知りました。
その書いてある文章の空気感に深い共感を覚えます。このような思いで作られている公募展で賞を頂いたこと、そして「絵画のゆくえ
2022」に参加できたことは嬉しく思えます。今回のことを糧にして、今後の制作や生活の励みにしていこうと思いました。

FACE2020　優秀賞



《朝ご飯》2019年
墨・胡粉・水彩色鉛筆・和紙

小俣 花名 Kana Komata

1997 年 東京都生まれ、東京都在住
2012 年 学内コンクール展 努力賞
2013 年 学内コンクール展 入選
別冊フレンド第509回BetsuFure マンガセミナー A コース
ジャンプSQ 第11 回クラウン新人漫画賞 最終候補
2015年 都立総合芸術高等学校美術科日本画専攻卒業
2016 年 中札内美術村企画公募展「二十歳の輪郭」最優秀賞
2018 年 第41回三菱商事アート・ゲート・プログラム 入選
2019年 武蔵野美術大学造形学部日本画学科卒業
2020 年 FACE展2020 優秀賞
第46回三菱商事アート・ゲート・プログラム 入選
第22回雪梁舎フィレンツェ賞展 優秀賞
2021年 武蔵野美術大学 造形研究科修士課程美術専攻日本画コース修了
第6回 宮本三郎記念デッサン大賞 特別賞
武蔵野美術大学大学院造形研究科博士後期課程造形芸術専攻在学中

【個展】
2021年「小俣花名 個展」コート・ギャラリー国立

【グループ展】
2021年「第30回奨学生美術展」佐藤美術館
第6回宮本三郎記念デッサン大賞展 小松市立宮本三郎美術館、世田谷美術館
2020年　FACE展2020
「灼灼－しゃくしゃく－」コート・ギャラリー国立
第22回雪梁舎フィレンツェ賞展 雪梁舎美術館、東京都美術館
2019年 「アートと遊ぶみんなの展覧会」羽村市生涯学習センターゆとろぎ
「奏−日本画選抜展−」銀座スルガ台画廊
2018年　第41回三菱商事アート・ゲート・プログラム
「掛軸と絵画のミライ展 美大生×表具師による軸装の可能性」東京八重洲画廊
2016年 「二十歳の輪郭」中札内美術村北の大地美術館

【Public Collection】
六花亭製菓株式会社

作家コメント

高校生の頃、色々な美術大学のオープンキャンパスをよく見に行っていまし た。そこで先輩方の作品を拝見しながら、そばに置いてある作品集の中に絵画コンテスト受賞の輝かしい経歴を見つけて「いつか自分もこの様な賞をもらって見たい。」と思っていました。その中の賞の 1 つがこの FACE 展の賞です。
ずっと憧れていた大きな賞 FACE 展での賞を戴けた事は私にとって、とても 衝撃でした。でもあまり器用でない私の制作活動を FACE が応援し、背中を押してくれたのだと、今ではそんな風にこの賞について思っています。
絵を描いていると、自分の思う様にできなくて悩んだり、せっかく頑張って 描いたのに「いまいちだね。」と言われて嫌になったり、自分にとってマイナス な出来事も沢山起こります。それでもめげずに小さい一歩一歩かもしれませんが、これからも制作を通してひとつずつ自分の答えを出していき、前に進んで いきたいです。

FACE2021　グランプリ

《sweet potato》2020年　パステル・スプレー・エアブラシ・キャンバス

魏 嘉　Jia Wei

1988年　台湾台北生まれ、東京都在住
2007年　国立台湾藝術大学　Visual Communication Design 金賞
2012年　国立台湾藝術大学ビジュアルデザイン専攻卒業
2019年　多摩美術大学大学院博士前期課程油画研究領域修了
2019年　シェル美術賞展2019 入選
2021年　FACE展2021 グランプリ
2023年　東京藝術大学大学院博士後期課程修了予定

【グループ展】
2021年 FACE展2021
2019年 多摩美術大学台湾人連合制作展2019「crossover」
Taipei Art Book Fair 2019
シェル美術賞展2019
2018年 EYE FLOW愛福禄、Taipei Artist Village
Taipei Illustration Fair 2018
2013年 GEISAI TAIWAN #2

【Public Collection】
SOMPO美術館

作家コメント

今でも不思議だと感じています。FACE2021でグランプリを受賞して以来、日常生活に多くの変化はありませんが、依然として様々な考えの綱引きに巻き込まれる中に浸っています。受賞したことで、多くの貴重な経験を得ることができ、もっと自分の内面を探り、自分の観点を理解できるような作品を作っていきたいという気持ちになりました。
今回の出品作品は、主なテーマはありませんが、いくつか観点とキーワードを考え「一切有為法、夢幻泡影の如し、違和感、桃花源記、脱力など」、「誤った情報の受信と真実な考えとの間のギャップと衝撃を造り出すこと」をモチーフとするいくつかの試みです。
いつもその時々に描きたいものを描いていますので、今後は伝統の文学、民族学、社会課題、ネットで見つけた画像など様々な興味を持つテーマに挑戦・試行し、それらに対する自身の想像力や面白い考え方を、特別な視点や表現で作品に表現していきたいと考えています。 同時に、情報受信のギャップがどのように現れるのか、実験して制作を引き続き行ってまいります。

FACE2021　優秀賞

《夜は静かに寝たい》2020年
油彩・キャンバス

鈴木 玲美 Remi Suzuki

1999年 静岡県浜松市生まれ、神奈川県在住
2018年 東京造形大学造形学部美術学科絵画領域入学
2020年 FACE展2021　優秀賞
現在　　東京造形大学造形学部美術学科絵画領域在学中

【個展】
2019年 「一つの魂を叫ぶ」東京造形大学10号館CS-PLAZA mime

【グループ展】
2021年 FACE展2021

作家コメント

常に「存在しているもの」を疑って生きている。ありとあらゆるものが何故そこに存在しているのかという偶然的な視点からも取り入れながら、人やもの、人と人の出会いから生まれる関係性を画面に構成し制作している。画面に現れる人物は無意識の中で経験として身についた私の「好きな形」であり、今の私を構成している一部である。
最近はあまり眠ることができない夜をテーマにした「夜は静かに眠りたい」シリーズを中心に制作しており、今回の展示で出品している作品群もこのシリーズの作品である。眠る前は人間関係のことで頭がいっぱいになり、その影響でなかなか眠ることができずにいる。苦しむ時もあるがこんなにも多くの人間と関わっていると思うと自分が存在していると認識できるため、夜は私の中で最も大事な時間なのかもしれない。私がそこにいて、他人もそこにいるということが、何よりも大事なのかもしれない。

FACE2021　優秀賞

《対岸で燃える家》2019年　油彩・パネル

高見 基秀 Motohide Takami

1986 年　石川県生まれ、千葉県在住
2010年　富山大学芸術文化学部芸術文化学科造形芸術コース卒業
富山大学芸術文化学部第1回卒業制作展GEIBUNI建畠賞 受賞
第8回全国公募西脇市サムホール大賞展 入選
vi a art2010 入選
2011年　第29回上野の森美術大賞展 入選
2012 年　東北芸術工科大学芸術工学研究科芸術文化専攻洋画領域修士課程修了
ギャラリーkingyo Derby展 入選
2013 年　空想美術大賞展2013 入選
2017 年　ACTアート大賞展2017 優秀賞
2019 年　FACE展2019 入選
2021年　FACE2021 優秀賞

【個展】
2021年　「三界の火宅を眺める」SEIZAN Gallery・東京
2020 年　「腥物を座視する」SEIZAN Gallery・東京
2019年　「Motohide Takami: Fires on Another Shore」SEIZAN Gallery・New York
2018 年　「対岸から見える風景」JINEN GALLERY・東京
2016年　「意識の外様」JINEN GALLERY・東京
2015 年　「都合のいい風景たち」JINEN GALLERY・東京
2014 年　「見たいものしか見えない」NICHE GALLERY・東京
2013 年　「うつし模様」SAN-AI GALLERY・東京
2012年　「高見基秀展」Gallery b. tokyo・東京

【グループ展】
2021年「惑星－PLANETS－」日本橋三越本店美術特選画廊・東京
2020年「八色の森の美術 スピンオフ展」人形町ヴィジョンズ・東京
「Catenations」Tiger Strikes Asteroid・New York
「ON THIS SHORE」SEIZAN Gallery・New York
「蟻のひと噛み」SEIZAN Gallery・東京
2019年「LANDSCAPE」GALLERY TSUBAKI・東京
FACE展2019
第三回「八色の森の美術展」池田記念美術館・新潟
「私の中の村上春樹 Ⅲ」ギャラリー枝香庵・東京

作家コメント

出品作品への思い：怖さの表出に見る人の外形
怖さとは何か、作品を通じて向き合えるような絵画を制作しています。
モチーフには事件や事故といった不穏なイメージ取り扱うことが多いです。と同時に、ただの怖いものが描かれているだけの絵にならないようにしています。これは、怖いものが描かれている絵画で完結するのではなく、作品とそれを見る人の関係性も含めて怖さを表現できる作品にしたいと考えているからです。
再現したい怖さというのは人の無関心な心の有り様であり、実際のリアルな事故写真や画像を使うのではなく、模型を配置して劇上のように陳列することで、観る人の無関心な目線を再現したいという狙いがあります。
私は、人の心理的に怖い部分を鑑賞を通じて構造的に再現することが、人という存在の輪郭を浮かび上がらせる一つの方法になると考えています。
それは人の能力的な限界が、人とそうじゃないものを分ける分水嶺であり、逆説的に人とは何か問うことができるものだと思っています。

FACE2021　優秀賞

《records》2020年
アクリル・クレパス・キャンバス

町田 帆実 Homi Machida

1994年　愛知県生まれ、東京都在住
2017年 シェル美術賞2017 グランプリ
2018年 TURNER AWARD 2017 未来賞受賞
2019年 多摩美術大学大学院絵画専攻油画研究領域 修了
2021年 FACE展2021 優秀賞

【個展】
2018年「Menu」Troubadour・神奈川

【グループ展】
2021年 FACE展 2021
「多摩美術大学助手展2021」多摩美術大学アートテークギャラリー
2020年「TAMABI Trial Exhibition ANYHOW」多摩美術大学アートテークギャラリー
2019年 FACE展2019
「Future Artist Tokyo 2019」住友不動産六本木グランドタワー駅前広場・東京
「タマビ助手展2019[poly-]」多摩美術大学アートテークギャラリー
2018年 TURNER AWARD2017 ターナーギャラリー・東京
FACE展2018
第15回三井不動産商業マネジメント・オフィース・エクスビジョン
「TAMA VIVANT II 2018Dissémination—散種」多摩美術大学アートテークギャラリー
「TAMABIselect-5- Artxhibition」多摩美術大学アートテークギャラリー
2017年「カタチアソビ展」フリュウ・ギャラリー・東京
シェル美術賞展2017

作家コメント

優秀賞をいただいた日、ケーキを買って帰ったことを覚えています。
その記憶をなぞるようにして、「choice」（出品作）を制作しました。
ひとつひとつを思い出しながら、盛り付けるように絵の具を置いています。
筆跡を目で追うと、余白の中にも景色を想像することができる私達の頭には、沢山の記憶が詰まっていることがわかります。
その中でも、生きていく上で必要不可欠であり、誰しもが持っている「食」の記憶について、描き続けています。
1人での食事が増え、飲み会ももうずっとしていません。
美味しかった料理のシェアは、四角い画面越しになりました。
これから先、食事はどう変化していくのでしょうか。
最近はそんなことばかり考えています。
作品を通して、こんな時代もあったなと、いつかを思い出すきっかけになれば幸いです。
これからも、ゆくえを見つめ、味わい、描いていきたいと思います。